

■各種報告 (JV賞受賞報告)

■JV賞受賞報告

～ 平成23年度JV賞受賞者に 奥津 良之 氏(アズビル株) ～

5 月 15 日(火) 銀行倶楽部において開催された第 33 回通常総会終了後、引き続き、「平成 23 年度 JV賞」受賞者の報告が行われ、受賞者として、奥津良之 氏 (アズビル株) AAC 営業本部営業技術部 FS1 シニアマネージャ/主管技師)に記念トロフィーと賞金目録が授与された。

奥津氏は、長年にわたり当会における部会・委員会活動の活性化に多大な貢献をされたとともに、製品技術水準を引き上げ、バルブ規格の国際標準化の普及・推進に尽力されたことが高く評価された。



当会事務所でJV賞目録を手にされる 奥津氏

*** JV賞 ***
 JV賞は昭和 63 年に設けられた賞で、本会に寄せられた寄付金を基金として、その運用益により、毎年1名を受賞者として表彰している。本会関係者を対象に、各部会、委員会、支部からの推薦による候補者を募集し、本会及び業界発展に大きく貢献された方に対し、賞状(又は記念トロフィー)と賞金 20 万円を、毎年5月の通常総会の場において授与。

■■■ JV賞を受賞して ■■■
たかがバルブ されどバルブ やはりバルブ

アズビル株 奥津 良之

この度は栄光の JV 賞 (日本バルブ賞) を戴き感謝申し上げます。ひとえに工業会先学諸先輩のご指導賜りました御蔭様と、身の引き締まる思いで拝受させて頂きました。

僭越ですが、少し自分の過去を振り返ってみたいと思います。

大学 2 年生の頃に調節弁を知りました。配属された流体工学研究室の大田英輔教授 (現在 早大名誉教授) が主査を務められ、早大理工と山武ハネウエル (現在のアズビル) および荏原製作所との共同研究「管内高速流に関する総合研究」を大規模に進めて居られ、私もその研究メンバーに加えて戴いたのが始まりです。1976 年の事です。私は 30 気圧の乾燥空気を貯気槽 (8 m³) に貯め自動制御装置を駆使して集合胴 (Collecting Chamber) の全圧と全温度の設定と維持を行いながら、テスト管路 (76mm 口径 x 4 m) に間欠的に高速空気を供給するブローダウン式超音速風洞実験設備を担当しました。最初の研究対象はケージ形調節弁およびコンタド形調節弁の内部流動で、それらの超音速流れの構造・振動と騒音の発生機構などを詳細に研究し続けました。大々先輩の町山忠弘教授 (故人) にも研究全般に亘り熱くご指導を受けました。とくに研究姿勢について町山先生は「奥津君、農民は米を作っていると思うか? 違う。そうではないよ、田を作っているのだ。良い田を作るから良い米が出来るのだ。実験研究も同じで、きちんと実験装置から熟慮しながら自分で作りなさい。良いデータはそこから自然に生まれるものだ。」との教諭を徹底され、私たちは実験準備と作業にも多くの時間と精力を使って来た気が致します。さらにその数倍の精力を掛けて、正に身を粉にして解析と理論化作業を進めました。このように得られた精密で再現性の高い実験データと相似則は「工業プロセス用調節弁に関する国際規格 IEC 60534 シリーズ」の根拠ともなり、現在、私が委員および議長として務める 国際電気標準会議 IEC/TC65/SC65B/WG9 および JWG17 での議論もこのときの経験が基礎となっています。

30 才直前に機会があり、大学教員を辞し早大客員研究員を継続しながら実業の現場である山武ハネウエルに移り調節弁の研究開発に没頭しました。石油化学プラント用標準弁の性能向上/研究開発を始めとして電力市場用シビア弁・石油精製市場用複座弁・石炭液化プラント用耐アブレージョン弁等々多くの新製品を開発させていただく機会に恵まれました。また配管屈曲モード解析・壊食/摩食寿命解析・二相流解析・下流配管と弁の流体関連振動/連成現象解析・噴流部の Bi-stable 流れ現象解析、対向噴流および噴流衝撃波と渦の干渉解析、あるいは凝縮振動等々 従来の業界難問のいくつかを実験的/理論的に説明できた事も良い思い出です。発電所や LNG 基地での調節弁不適合事例の解析成功例も複数個貯まり、まとまった成果をそれぞれ学術論文として各学会に報告することもできました。これら一連の製品と技術成果は各学会からも評価され、また多くのお客様からも、さらに国内外競合各社からも高い評価を伝え聞くに至りました。

僭越ながら「技術の山武」「調節弁の山武」の名声確立に部下とも 1 つになって貢献できた素晴らしい時代であったと回顧しています。一企業を介して結果的に、バルブ業界全体の技術水準引き上げに、ある程度は貢献できたものと密かに自負しております。

ただ 2001 年に企業組織構造が改変され、紆余曲折を経て私は「全社技術者教育」を担当することになりました。鋭意、教育シ

■各種報告 (JV賞受賞報告)

ステム構築作業を進める一方で、大学の客員研究員である立場や SICE/JSME/ASME/GTSJ など学会正員である立場を活用/工夫して一層、社会のために・人類のために「調節弁の研究と体系化」を心掛けるようになりました。さらに日本バルブ工業会との素晴らしい出会いがこの時期だったと思います。

日本バルブ工業会では、最初は IEC 国内委員会に所属し、竹中俊夫委員長(当時、東工大名誉教授)逸見憲昭幹事(当時、ニイガタ・メーソンネーラン)はじめ多くの諸先輩方に詳細に国際規格はどうあるべきか熱心な議論と共に、熱くご指導いただきました。1995 年に WTO/TBT 協定が発効し、各国強制規格や製品適合性評価は ISO/IEC 国際規格を基礎とすることが加盟国に義務づけられました。その後 2001 年中国の WTO 加盟もあり、グローバル化した現在のように産業と貿易が国際規格に完全に統制され、まさに国際戦略は EU のみならず米国や中国・韓国・日本を主舞台にした国際標準活動によるドメイン作り・壮絶な陣取り合戦に至ったことは、当時の私たちの議論と予測を大幅に超えていたのかも知れません。現在 IEC/TC65/SC65B/JWG17 の Convenor(議長)として調節弁に関する LOPs(List Of Properties の電子データ化標準規格)を各国代表と進めています。日本バルブ工業会 IEC 国内委員会で 15 年以上に亘り実際の各社技術者と議論を積み重ねた結果を最大限に生かして、国益を鑑みつつ国際審議に臨んで居ります。なお、IEC 国内委員会同一メンバーとユーザ代表委員とともに国際規格 IEC 60534 シリーズをその技術的内容を変更することなく(IDT)翻訳した JIS B2005 シリーズ 18 本を順次制定致しました。現在は大田英輔委員長を中心に私が幹事となって Maintenance(維持)作業を鋭意進めさせていただいております。一層皆様の篤いご協力を賜りたいと希望している次第です。

自動弁部会では既に 10 年以上に亘りお世話になっております。部会から技術委員会・技報編集委員会・バルブ産業ビジョン策定委員会・バルブ便覧編集委員会・広報委員会等々に派遣していただき、多くの会員の皆さまと交流させて戴きました。とくにそれぞれの新旧委員長には非力な私に叱咤激励を戴きながら、丁寧に議論をお誘いくださり心より感謝致しております。あわせて実践的視野も顕著に広げることが出来ました。なお、横山巖 前自動弁部会長(東工・バレックス会長)様には部会活動を通してとくに熱く御指導戴きました。ここに特記致しまして深く感謝の意を表します。

ここ数年は講演を頼まれることが多くなりました。学会でも産業界でも私の講演主題は「なぜバルブは重要か?」です。自然界・産業界はフィードバック機構が働いて成り立っています。因果応報と諸行無常の繰り返しです。昨今とくに産業界での大規模不適合をテレビや新聞で見聞します。海底油田掘削プラント・発電所・ロケット推進機構・化学コンビナート等等あらゆる産業を「バルブ」は KEY テクノロジーとして支えています。しかし、その議論の中で果たしてどのくらいの多くの技術者が「バルブ」について正しく認識しているのか、多数配備されるバルブのひとつひとつの重要度を正確に意識していたのか疑問になるところがあります。「バルブ」は過酷な現場にあって最終操作端(Final Control Elements)となって稼動し続ける宿命を持ちます。一方、社会では各種の「信用が収縮」し歪(いびつ)な「コスト至上主義」がなお蔓延(はびこ)る昨今でもあり技術力が軽視され疲労は進み品質が低下する危険な状態が迫っています。**たかがバルブ**といわれる顧客も実際にいらっしゃいます。**されどバルブ**は確定的に重要な操作端です。バルブ無しにプラントの適正運転・危機回避プログラムは有り得ません。**やはりバルブ**の技術力を一層高めるべきなのです。他の機器との連成を意識しながら動作の信頼性を一層引き上げるべきです。そして社会基盤インフラは堅牢な技術で支えるべきなのです。2 年前に公募し広報委員会で選考決定された JVMA イメージキャラクター「**ばるちゃん**」には社会を支えるべきバルブ産業人の使命と人類社会安泰への願いが込められているはずで

従来「**陰徳の美学を貫くバルブ技術者**」であってもこの時代は機会をとらえて技術者が社会・産業界を積極的に教育してゆくことが重要と考えています。私は引き続き、社会に対して何がしかの貢献をしていく所存です。皆様どうぞよろしくご指導くださるよう切にお願い申し上げます。

最後になりましたが日本バルブ工業会会員皆様のご健康とご繁栄を祈念致しまして、受賞に際してのご挨拶とさせていただきます。